

<今回>258回目 2019年5月27日(月)15時~18時 602号室
読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p45 陳寿の目 から

<前回>257回目(19-5-13) 出席者 10名
資料(19-05-13-1)前回のまとめ(清水)
-2)官衙遺跡の分析(肥沼)

A 報告 山本さん、高山氏は欠席。肥沼氏、渡辺さん出席、東戸塚古代史講座は締め切られたが35名募集のところ72名の応募があり、また2回に分けて実施できるか検討されたが会場側の都合で1回になったとのこと。

B 資料 -2)肥沼氏より、これまでの彼の研究テーマ「重層的な柱穴遺跡から官衙遺跡など」の資料が公開されてきたので、それを順次調査している。福島県南相馬泉官衙遺跡のⅠ期、Ⅱ期a、b、Ⅲ期a、b、cの6表が具体例として示された。この分析から東偏、西方位、規模の大きさから九州王朝、近畿王朝(律令制時期)の栄枯盛衰を論じようとするものである。また聖武天皇の国分寺の詔は7重の塔建設を指示したものである。として全国の国分寺、国分尼寺の遺跡に注目して九州王朝がすでに建設してたのに追加して7重の塔が建設されたのではないかと調査しているという。

懇親会7名 津多屋14158円(2000・7) -158円

C 読書 p34 王莽の先例 から 交代読み

- 1)漢書匈奴伝 故印文曰「匈奴单于璽」、王莽「新匈奴单于章」共に印材は玉璽鈕の最高印。漢の匈奴单于に対しては兄弟国の立場。新の国は用語で差別した。志賀島の金印は後漢の建武中元2年(57年)新建国は元年(9年)同じ政府機関の起草者で2段国名しかないのは当然。
- 2)匈奴と委奴 委奴は100余国の部族の長、匈奴は夷蛮中最大の存在。猛々しいと従順、字面の意義から見ての3段読みはない。(奴は群れている相手集団に対する蔑称)
- 3)光武帝の先例 韓伝に「漢廉斯邑君」という称号を与えたとある。中間者の介在を認めない。(志賀島の金印の13年前)廉斯は地名、邑は国より小さい土地領域。君は長。
- 4)志賀島の金印の研究史を遡る 発見は天明4年(1784年)一農夫によって発見されたとされる。その時亀井南冥は「奴」は「ノ」。「倭奴」は「ヤマトノクニ」と発表した。竹田定良は倭奴は日本の古号である。「安徳天皇の海中取落とし説」が出された。下関海峡で海中に亡くなられたから。
- 5)委奴=伊都説 上田秋成(天明4年)が提唱。他多数の賛同者が出てしばらく定説の地位をえていた。
- 6)三宅説 3段切れ論(漢委奴国王印考)「奴」は「難の縣」現代の那珂郡のナ ①音韻が合わない。キとイ、奴(ド)と都(ト) ②極南海 伊都は九州北岸、奴は2つあり、21か国最後の奴と中国側が間違えた。音韻説は説得性があった。
- 7)三宅説への反論 稲葉君山の批判。①金印は「奴」のような小国に与えられた例はない(滇王は小国ではないか)。中国の印文のルールにはない。②宗主国に与えるもので、陪従者ではない。漢制に反する。市村瓚次郎、大森志郎も3段読みは中国古印の例にはないと鋭く指摘されてきたが、自己の独解法を述べる段になって、地理的困難さに苦しんだ。委奴=中心国(近畿)に悩んだ。「倭奴」は倭族全体のことを言っている。
- 8)伊都国説への批判 音韻批判で学的地位を失った。統統の語法の問題を提起された。燕の真番、朝鮮の略属(史記朝鮮列伝)などの例を示した。阿部秀雄は逆に読んだ。A属B。しかし事実関係によって否定される。伊都国が代表者ではない。(語順関係や名詞動詞形容詞では不明)

次回日程 19-6-3(月) 15時から18時 306号室
-6-21(金) 15時から18時 601号室

－7－8(月) 15時から18時 603号室